創立七十周年記念メッセージ

名誉教授（文学部）　福田　益和

熊本県立大学創立七十周年、まことにめでたく慶賀に堪えません。

本学の歴史を顧みても、創立時の熊本城内時代、ついで大江町渡鹿時代、そして現在の健軍・月出の時代と、時・場所こそ異なれ、未来を見据えた教育への熱き思いは一貫して変わることなく脈々として今に続いていると皆が感じている通りです。私は「熊本女子大学」時代の晩期に教員となりましたが、実はそれよりずっと以前から渡鹿校舎は個人的には馴染み深いところでした。大学の先輩が本学の教員をしていましたので頻繁に研究室へお邪魔をし、時にはキャンパス内を散策したりして忘れられない思い出がいっぱいありました。また、亡妻が本学の卒業生（十四回・家政学科）でもあり、いつも母校の思い出話や自慢話をしてくれました。恩師のエピソードや学友との交流などです。その大学に私自身が教員として勤めることになり、「ご縁」というコトバが胸にジーンと来たことを今も鮮明に覚えています。

赴任の頃は「女子大学」から「県立大学」へと移行する節目の時でもあり、それに男女共学制となったせいか学生諸君の向学心はいやましに高まり研究室も連日熱気に溢れていました。その若きエネルギーは今も「宙（そら）へ」飛翔しながら絶えることなく生きつづけていると多くの人から聞いています。

久しぶりに月出のキャンパスを訪れ、白亜の校舎の前にたたずんでシンボルタワーの勇姿を見上げました。次に、泉水のほとりに立っている「婦人裸像」の前でしばらく時を過しました。彼女のまなざしは遠くに注がれ、大学の行く末を見守っているかのようです。

熊本県立大学の更なる発展を一教員ＯＢとして心から祈念してやみません。

樹木への想い

名誉教授（文学部）　竹原　崇雄

県立大学の玄関らしくない玄関の前に、大江校舎の地から移し植えた木犀の古木がある。花をつけると何か人懐かしい香りを強く放つ。昨年話題になった又吉直樹氏の『火花』の一節に金木犀の香りが人との出会いを導く場面があるが、この玄関前の木犀も普段は目だたないが花の季節になると遠く去った昔の人の面影を匂いに包んで運んで来てくれるような気がする。

キャンパスの東側にのどかな草地の運動場があるが、その西北の隅に大江の地から移し植えた数本の桜が残っている。生活科学部棟の増築の前は南北に並んだ桜がその季節を彩った。近所の人が訪れて花見を楽しんでいた。桜の傍の鉄棒に下がるのが楽しみだった。

旧体育館と生活科学部棟との間の中庭に四本の枝垂桜がある。花はつけるがここ数年元気がない。一本は枯れているようである。外国語教育センターが建つ前、西門から文学部棟にかけてなだらかな勾配の芝の園庭が広がっていた。昭和六十年頃であったろうか英文科の卒業生がそこに記念樹として枝垂桜を植えた。細い木だったがすんなりと垂れた枝にちらほら花をつけるようになっていた。それから三十年の歳月の変遷をこの桜は知らせてくれる。この桜の下に「実験動物に感謝す」の碑が祀ってある。

図書館、外語センターが建つ前この周辺には飛行場の名残として十数本の小さな松林があった。一帯が健軍飛行場だった時代この松林の中に義烈空挺隊の慰霊碑があった。空港が高遊原に移る際それは自衛隊総監部内の松林の中に移され今にいたっている。外語センターが建つ際、現在残っている四本の松も切られるところであったが、文学部教員有志が松を護る趣意書を学長に提出して「松の木は残った」のでる。センターの東北の隅の一部分がいびつな形になっているのは松を残したための傷である。松は戦後に植えたものという説もあるが私は執念深く空挺隊の「見送りの松」という伝承を捨てきれないのである。

古代このあたり一帯は「託麻」と呼ばれ根を染料にする紫草の産地であった。大宰府政庁に献上した木簡が残っている。現在県立大の同窓会を「紫苑会」と称するのは紫草を詠み込んだ万葉歌に因んでいる。同窓生はすべて「紫のゆかり（縁）」によって結ばれているのである。横田会長の名刺は紫草の白い花が刷り込まれている（紫草は竹田市の志土知で栽培されている）。

七十年の歴史の内実は重い。老いた感覚には四季の推移のように美しく映る。香り高い千年の屋久杉のように世の風雪に耐えて新たな年輪を刻んで頂きたい。（以前福岡紫苑会に寄稿した内容と一部重複する）

今はただ感謝

名誉教授（文学部）　江口　正弘

県立大学に勤めたのは昭和四九年四月から六五歳で定年退職する平成一二年三月までの二一年でした。その間に県下、否、九州内の才媛・秀才を集めて講義をすることができたのは今思えば楽しい充実した期間でした。昭和五五年三月までは渡鹿で、それ以来は現在の月出の地での研究室でした。渡鹿の教室は木造で二階を歩く人の足音がコトコトと優雅に聞こえたものです。一方月出の方は各研究室の隣に演習室がある冷暖房完備の部屋に当時は目を見張ったものです。

女子大勤務の間に一年だけ大学に籍を置いたまま国際交流基金からの派遣という名目でブラジルのサンパウロ大学に客員教授として赴任しました。ブラジルでは昼夜二部制で八割かたは日系人でした。この人々に日本文法や日本の作品を読むことなどをしました。ブラジルでは教室で教えること以外は会議などで制約されることがなく、ひまを見つけては国中のあちこちを観てまわりました。リオのカーニバルやパンタナールという湿原で鰐やピラニヤと戯れたり、またアマゾンを下ったことなどが記憶に残っています。

一方この女子大学では改革の動きが続いて男女共学の県立大学構想が次第に強まって今までの文家政学部から文学部を独立させ、また大学院をつくるために文部省に何回か出かけた記憶があります。〇合という高い研究業績を持つ教授が各科三人以上必要ということでしたが、それも立派にクリアして無事に発足のはこびになったことなどが思い出されます。

こう振り返ってみると、県立大学での生活が私の人生の大部分を占めていることが感じられ、改めて感謝の念が湧いて来ます。

県立大学の今後の発展がますます進むよう衷心より念じている次第です。県立大学にかかわっている皆様のご多幸と大学に発展を衷心より念じています。

文学部英文学科のいとなみ

名誉教授（文学部）　重松　隆矣

文学部英語英米文学科とは何をするところか。1969 年～ 2002 年 PUK でイギリス文学鑑賞を担当してきたが、二つの学生との共働鑑賞のケースを振り返ってみる。● *Joanne Katherine Rowling : Harry Potter and the Philosopher's Stone*, を松岡裕子訳の日本語版が出る前の 1998 年に演習のテクストにした。演習の最低要求は、割り当てられた 1 ／ 2 章の *weighing of plot, punch line / passage* の指定と音読、その衝撃・感動・展開の予感の内容、そしてほかの作品・古典の引用ないしエコーの指摘、プラス何らかの個性的な気づき、といった作品鑑賞のベースとなる作業の発表だ。それに対してコメントを返す。冒頭から引き込まれる作品だから、活気あるセミナーが生まれた。彼らは全作品の完結を待たずに卒業していったが、最終巻 *Harry Potter and the Deathly Hallows, 2007* まで幾人かは読み進めたことだろう。● *Ann Philippa Pearce*：*Tom's Midnight Garden*、1958、を読んだ。「英語」のクラスを「演習」として運営した。*Antoine de Saint-Exupéry*：*Le Petit Prince* が歳月を隔てた再読に、より成熟した読書体験を以て報いる名作であるように、語りの名手 *Pearce* のこの作品もまた我々読者をいつかは実りある再読へと誘うであろう。実は、演習の裏側でこんなことが起っていた。どうしても読解できないところがあって、受講者たちは、集団の議論で読みを深めるべく彼らだけの「*TMG* セミナー」を立ち上げて数回の集まりを開いていた。卒業後にそう話してくれたのだが、仲間はずれは残念至極ながら、*Philippa* の作品がそれほどに '*demanding*' だと受け取られていたことに満足した。

英文科の、延いては文学部の営みは、このように作品の解題を核とする文脈との闘いである。20151221 の鷲田清一「折々のことば」は大宅映子の「死ぬとわかっていてなぜ人間は生きていけるのか。その根源的な理由を考えるのが、文学部というところです。」を引いて、以下のように言っている。それを結びとする。

「意表をつく表現だが、ほぼ完璧な人間学の定義だと思う。思想も文学も美術・音楽も宗教も、個の限られたいのちを超えて個を支えるもの、ひとが＜人類＞として創造し伝えてきた価値である。人文学はそうした創造の意味を問い、さらにその歴史的な連なりを跡づけようとする。」

郵便碁

名誉教授（文学部）　平戸　善文

定年まで二十八年間と、その後非常勤講師数年間については、既に「開学五十周年記念誌」に〈大きな変革のただなかに〉と題して、また「創立六十周年記念特集」（文学部発行「文彩」第四号）には、〈二十八年間を振り返って〉を、さらに英語英米文学会の機関紙「ＥＬＬＡ」第二号では、〈私の英文学史〉という題で、熊本女子大・県立大にまつわる思い出を書いているので、ここでは在職中に始めたのが今も続いて、僕の生活の極めて重要な一部になっている事について述べてみたい。

それは福岡市在住の柴田稔彦氏とハガキを遣り取りして打つ碁、即ち郵便碁である。

昭和五十八年十一月中旬のある晴れた日に、英文学科の学生のための特別講義を、我が国有数のシェイクスピア学者である福岡大大学院の柴田教授にお願いしたのだった。

夜の懇親会の席で柴田さんと僕は、語学ならぬ碁学談義に花が咲き、共に関心のあった郵便碁を実践することになった。二人とも五十路を若干越えていた。

一枚のハガキで二局打つことにして、（１）①１６の四（星）、（２）①４の十七（小目）といった具合に、熊本から送り出す熱戦の使者に対して、福岡からの返事は大抵三日後である。

当初から僕は書斎兼応接室のテーブルに、通常の卓上碁盤とマグネット碁盤を置き、二局の進行通りに黒石と白石を並べていった。

一手進む毎に局面は千変万化する。そのため毎回盤上に次の手を幾通りか置いてみて、それぞれに相手の応手をあれこれと予想し、序盤・中盤・終盤に亘って、一手一手の価値と効用を比較考量するのに時間を惜しまない。

これが実に三十四年間続いて、押入にうず高く積み上げられた柴田さんのハガキは優に二千枚を越えた。海外で受け取った絵ハガキもあれば、病院のベッドに届けられたものもある。

一局の決着がつくのに一年半以上を要することもあるけれど、手間ひまかけて名局を作り上げようと努める過程こそ郵便碁の醍醐味であり、次のハガキ・またその次のハガキを待ち受ける楽しみは格別である。

（二〇一七年　盛夏）